

## 根管治療に関するアンケート調査I(東日本歯学会第23回学術大会 一般講演抄録)

著者名(日)	小林 孝雄, 森 真理, 塚越 慎, 加藤 幸紀, 中島 啓介, 斎藤 隆史, 古市 保志
雑誌名	北海道医療大学歯学雑誌
巻	24
号	1
ページ	116-117
発行年	2005-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00009917/">http://id.nii.ac.jp/1145/00009917/</a>

## 成人男性における鼻腔通気度計測

○小林 成匡, 山崎 敦永, 溝口 到  
北海道医療大学矯正歯科学講座

**【目的】** 矯正歯科の領域では鼻呼吸障害と顎顔面形態との関連については従来から多くの研究がなされてきた。しかしながら鼻呼吸機能については、鼻粘膜が外的（外気、温度、湿度など）および内的（体位、精神的状態、運動など）要因により鼻腔通気度に影響をあたえているので評価が難しいとされている。また、左右の鼻粘膜が時間の経過と共に交代性に腫脹、収縮を繰り返す生理的変動（nasal cycle）の存在も報告されている。そこで今回、鼻腔通気度計 RYNO 2000（Menfis biomedica s.r.l. BOLOGNA）を用いて鼻呼吸抵抗の測定方法を紹介しますとともに、成人男性における鼻呼吸抵抗の日内変動について報告する。

**【方法】** 1. 対象と資料 対象は本学歯学部附属病院勤務の平均年齢32歳4カ月の成人男性15名を対象とした。被験者は、鼻アレルギー

一などの鼻疾患、および呼吸器疾患、鼻中隔湾曲のある者は除外した。

2. 計測方法 測定にはRYNO 2000を用いた。この鼻腔通気度計は自然の鼻呼吸状態で測定する方法（active法）で、片側鼻腔で気流速度を測り、他側外鼻孔から上咽頭圧を誘導するanterior法である。測定時は室温を25℃と一定にし、測定10分前に被験者を椅子に自然な姿勢で座らせてから行った。測定時間は、午前9時から測定を開始し、1時間ごとに午後6時までの計10回とした。測定結果の分析はANOVA分析を用いて行った。

**【結果】** 本研究における計測時間内で鼻腔通気度に有意差が見られなかったことから、鼻腔通気度計測の有用性が確認された。

## 本学歯学部附属病院矯正歯科外来における唾液検査およびう蝕予防プログラム

○佐々木真弓\*, 柴 浩実\*, 北口 佳奈\*, 六車 武史\*\*, 山崎 敦永\*\*, 溝口 到\*\*  
\*北海道医療大学歯学部附属病院歯科衛生部, \*\*北海道医療大学歯学部矯正歯科学講座

**【目的】** 本学歯学部附属病院矯正歯科外来では、1998年度から以下の項目を目的として唾液検査を実施している。

1. 個人のリエスリスクの把握
2. 矯正歯科治療中の口腔衛生指導におけるモチベーションの強化
3. 個人に合ったう蝕予防プログラムの作成

今回は唾液検査の内容、カリオグラムに基づいたう蝕予防プログラム例および2003年度までの実行率について報告する。

**【方法】** 対象は矯正歯科治療を開始した患者全員とし、以下の手順で唾液検査を行い、う蝕予防プログラムを作成した。

1. 予約時に検査前の禁止事項などについての説明をする。食生活調査表を渡し、休日を含んだ4日間の生活全般の内容を記入してもらい、検査時に提出してもらう。
2. 5分間の刺激唾液を採取し、唾液分泌量、唾液緩衝能、ミュー

タンス菌数、ラクトバチラス菌数を調べる。

3. 検査結果とその他の情報を3段階評価し、レーダーチャートに記入する。記入内容をカリオグラムソフトに入力し、リエスリスクを評価する。

4. リスクに応じて個人のう蝕予防プログラムを作成し、提示する。

**【結果および考察】** 唾液検査を導入した1998年度は53.1%、2003年度は88.4%と徐々に実行率は上がっている。ただ、唾液検査を希望しない、長期的な抗生物質の服用などの理由から全員に実行するには至っていない。またう蝕予防プログラムを作成し提示することで、口腔衛生指導におけるモチベーション強化へつなげることができた。

## 根管治療に関するアンケート調査 I

○小林 孝雄\*, 森 真理\*, 塚越 慎\*\*, 加藤 幸紀\*, 中島 啓介\*, 斎藤 隆史\*\*\*, 古市 保志\*  
\*北海道医療大学歯学部歯科保存学第一講座, \*\*浦臼町歯科診療所, \*\*\*北海道医療大学歯学部歯科保存学第二講座

**【目的】** 術前に自覚症状がない歯に対して感染根管治療を行うと、急性症状が引き起こされることがある。このようなことが起こると患者との信頼関係を確立する上で障害となる。しかし、そのような急性発作の原因、対処方法、および予防に関しては、個々の歯科医師の経験によるものが大きく、コンセンサスが得られていないのが実態である。そこで本研究では、感染根管治療開始後の急性発作の発現に関する実態を把握するために、根管治療に関するアンケート調査を行い検討した。

**【方法】** 調査対象は、北海道医療大学在籍する歯科医師171名であ

った。質問内容は、臨床経験年数、抜髄治療の回数と治療間隔、感染根管治療の回数と治療間隔、感染根管治療開始時の急性症状の有無、感染根管治療開始後の急性発作の頻度、部位、対処方法および急性発作の原因であった。集計結果を $\chi^2$ 検定を用いて解析した。

**【結果および考察】** 本調査では110名から回答を得た。回答者の臨床経験は1～30年で、平均7.93±6.60年であった。全回答者を経験年数で1年、2～5年、6～9年および10年以上の4群に分類して解析を行った。経験年数が1年の群では他の3群に比べ、「感染根管治療開始後に急性発作を引き起こすことがよくある」との回答

が、有意に多かった。また急性発作の頻度は1年の群では他の3群に比べ有意に高かった。急性発作が起こった部位は上下顎左右大臼歯と上顎切歯が多かった。急性発作後の処置に対する回答では、抗菌薬、鎮痛薬の投与、根管開放が多かった。急性発作が起こった原因として考えられたのは、器具の突き出しと削片の押し出しとの回答が多かった。結果より経験年数に関わらず、感染根管治療の開始

後に急性発作を起こすことがあると答えたものは、ないと答えたものより多かった。急性発作の原因としては器具の突き出しや削片の押し出しによるとの回答が多かった。急性発作を予防するためには、基本的な根管器具の使用方法を徹底することが重要であると考えられた。

### 北海道医療大学歯学部浦臼町歯科診療所でのアンケート調査

○塚越 慎\*, 越野 寿\*\*

\*北海道医療大学歯学部浦臼町歯科診療所, \*\*北海道医療大学歯学部歯科補綴学第一講座

【目的】浦臼町歯科診療所は北海道医療大学歯学部の地域支援活動の一事業として運営されている。地域支援活動として診療を行うためには、その地域、住民の情報、歯科治療に関する知識やニーズについて知る必要があると思われる。そこで今回浦臼町において歯科治療を行うための参考資料とすることを目的として浦臼町歯科診療所に来所している患者に対しアンケート調査を行った。

【対象および方法】北海道医療大学歯学部浦臼町歯科診療所に来所中の患者50名に対し、本歯科診療所へ来所した動機、本歯科診療所の良いところ、悪いところ、治療に対する希望、診療所に望むこと、歯科予防処置、自費診療の項目についてアンケート調査を行った。

【結果および考察】来院理由については、家から近いからが78%と圧倒的に多く、次に従業員が親切だからとの項目が46%と多くなっている。診療所のよいと思うところについては治療の内容を説明してくれる、対応が親切であるが、それぞれ72%、68%と高い割合を示していた。このような診療所においてはただ診療を行うだけでなく、患者との信頼関係をより深く築いていかなければならない

と考えられた。

診療所の悪いと思うところについては治療期間が長い18%と一番多く、治療に対する希望では、痛くない治療、時間がかかってもしっかりした治療がそれぞれ34%、26%と多くなっている。診療所に望むことでは治療時間が長くなっても来院の回数を少なくしてほしいが30%と多くなっている。浦臼町の主要産業が農業であることを考慮すると患者が来院できる時期や時間が制約されることがあると考えられた。

予防処置については必要がないとの回答が0%であり、積極的に行っていくべきであると考えられる

保険外の治療については保険の治療で十分であるが50%を示していますが、必要なら行ってもよいが26%を占めており、来院している患者の歯科治療に対する理解の程度が高いと考えられる。

以上のことより本診療所が町立の診療所として学理に則った診療を行うとの診療方針が地域に受け入れられているものと考えられた。

### 本学歯学部附属病院における臨床実習到達度の調査 — 歯科衛生士専門学校生の小児歯科でのアンケート調査より —

○駒木 千絵\*, 小川原詩織\*, 武井 貴子\*, 五十嵐清治\*\*

\*北海道医療大学歯学部附属病院歯科衛生部, \*\*北海道医療大学歯学部小児歯科学講座

【目的】本学歯科衛生士専門学校の小児歯科臨床実習での到達目標は、大きく分けると次のとおりである。

- 1) 小児および保護者への適切な対応ができる。
- 2) 適切な齲蝕予防処置や口腔衛生指導ができる。
- 3) Four handed dentistryの実際を習得できる。

これらの目標を達成させるために実習項目は細かく分かれている。そこで、すべての課題を習得して目標に到達させるためには、学生の理解度を指導者が認識しておくことが必要であることより本調査を行った。

【方法】対象は歯科衛生士専門学校2年生、59名である。H16.5.10～H16.11.14期間の臨床実習終了後にアンケート調査を無記名で実施した。調査内容は実習開始前に配布しているプリント、実習初日のオリエンテーション、診療の準備、口腔衛生指導および診療補助についてである。

【結果および考察】アンケート結果からは、「コミュニケーションが取れなかった。」「技術不足を痛感した。」「伝えたい事を上手く伝えられなかった。」などの意見が多く見られた。学生は、頭の中である程度理解して実習に挑んでいるようだが、患者さんを前にすると緊張や経験不足から知識や能力が十分に発揮されていないことが推測された。限られた臨床実習期間ではあるが、多くの患者さんと接し、多くの経験を積むことによって職業意識をしっかりと持つ医療人になると思われるため、より多くの満足感を得ることができる臨床実習のあり方を再考する必要があると示唆された。したがって今後の小児歯科での課題として、口腔衛生指導・口腔ケアの実技を100%の学生が体験できるシステムを構築すること、事前学習としてのプリントやシミュレーション実習のあり方を見直すこと、また、患者さんの来院までの待ち時間を有効に利用するなど、検討を重ねていきたいと考えている。